

平成27年10月入学岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程【留学生特別入試】
 ・平成28年度岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程【8月募集】入学試験問題

講 座	人間行動論
専門科目 1	心理学

問題 1 と問題 2 の両方に解答しなさい。解答用紙には問題番号を明記すること。

問題 1

以下の(1)～(5)の事例から 2 つを選択し、それぞれを心理学的に説明しなさい。

- (1) セリグマン氏は、珍しいホワイトソースのかかったフランス料理を食べたあと、夫婦でオペラを鑑賞し、帰宅したあと、激しい胃けいれんに襲われた。のちに、その胃けいれんは食事とは関係ないことが分かった。しかしこのたった一度の経験のあと、彼はホワイトソースが嫌いになった。いっぽう、奥さんの顔やオペラの音楽が嫌いになることは無かった。
- (2) ニホンザルは、群れによって、食べ物の好みに違いがある。また、同じ群れの中では、年長の個体より若い個体のほうがいろいろな種類の物を食べる。
- (3) ラットにサッカリン溶液を飲ませた後、吐き気を催すような薬物を投与したところ、ラットは、以後、実験ケージ内においても飼育ケージ内においてもその溶液の摂取量を減少させた。いっぽう、別のラットには、サッカリン溶液を飲ませたあと軽い電気ショックを与えた。そのラットは、電気ショックが与えられた場所ではサッカリン溶液を飲まなくなったが、飼育ケージで与えられた同じ溶液には以前と同じ程度の好みを示した。
- (4) ラットにサッカリン溶液を飲ませてから 6 時間後に、吐き気を催すような薬物を投与しても、以後、サッカリン溶液を飲む量は著しく減少した。いっぽう、サッカリン溶液摂取から 6 時間後に電気ショックを与えても、サッカリン溶液を嫌いになることはなかった。
- (5) 日本では古くから一緒に食べてはいけないという「食い合わせ」の言い伝えがある。「鰻と梅干し」、「天ぷらとスイカ」、「蟹と柿」など。

問題 2

異文化理解において、母集団を代表する保証のない少数事例を、主観的に分析することによって生じる問題について簡潔に説明しなさい。また、この問題を解決するための具体的な方策についても簡潔に記しなさい。

以上